

6. 前立腺癌患者の術前自己血貯血における十全大補湯の使用効果

自治医科大学附属大宮医療センター 泌尿器科¹⁾
自治医科大学腎泌尿器外科学講座 泌尿器科学部門²⁾
○松崎 敦¹⁾、寺内 文人¹⁾、鷲野 聡¹⁾
小林 裕¹⁾、森田 辰男²⁾

【目的】輸血による諸問題を防ぐ目的から、泌尿器科手術においても大量出血が予想される場合自己血輸血が主流となっている。その際、自己血採取による貧血の出現や進行が問題となる。貯血式自己血貯血において、鉄剤と Erythropoietin を併用することで問題なく貯血出来る症例が多く、さらに漢方薬を併用することで、より効率よく貯血が可能になったとの報告が多くみられる。しかし、漢方薬単剤投与での自己血貯血の可能性についてはほとんど検討がなされていない。今回、前立腺癌患者の術前自己血貯血において十全大補湯を単剤で投与した際の貧血改善効果について検討した。

【対象と方法】根治的前立腺摘除術のため術前に貯血式自己血輸血の承諾が得られた症例を対象とした。単純貯血式で1回に400mlの貯血を行った。初回貯血後より鉄剤を連日経口投与した症例（鉄群）と初回貯血後より十全大補湯を連日投与した症例（十全群）において、経時的な赤血球数、ヘモグロビン値、ヘマトクリット値および減少度について比較検討した。

【成績】両群ともに内服中断の症例や、内服および貯血による合併症を併発した症例はみられなかった。十全群では2回目貯血による検査値の有意な減少はみられず、また2回目貯血によるヘモグロビン値の減少度は鉄群と比較し有意に少なかった。また、十全群では経時的に減少度は少なくなった。

【結論】十全大補湯単剤による自己血貯血では、鉄剤単独による自己血貯血と同等の貧血改善効果が得られると考えられ、また時間経過と共に貯血による検査成績の減少度が少なくなることが判り、その有用性が確認された。また、漢方薬を使用した自己血貯血法は、副作用や医療費をも考慮すると有用な貯血法であると考えられた。

7. 麻黄湯のマウス腎細胞癌に対する副作用軽減効果および抗腫瘍効果

旭川医科大学 泌尿器科
○佐賀 祐司、安住 誠、加藤 祐司、北原 克教
川上 憲裕、奥山 光彦、柿崎 秀宏

【目的】腎細胞癌有転移症例の本邦における標準的治療は、インターフェロン α (IFN- α) による免疫療法である。しかし、IFN- α の奏成功率は10-20%にとどまっており、より効果の高い治療法の確立が期待されている。一方、IFN- α の副作用として発熱、悪寒、倦怠感、筋肉痛などがあるが、これらはインフルエンザ感染の初期症状と酷似している。インフルエンザの感染初期に自然免疫応答を発動させている中心的なサイトカインがIFN- α であるため、同一症状を呈するものと理解される。そこでインフルエンザ感染初期に多用される太陽病期漢方処方である麻黄湯が、IFN- α の副作用を軽減するか否か、さらに抗腫瘍効果に影響を与えるか否かについても検討した。

【方法】BALB/c マウスに腎癌細胞株 Renca を皮下移植 (day 0) し、担癌モデルを作成。マウス IFN- α 2.0x10⁴ IU 5日間連日投与 (day 20-24) およびツムラ麻黄湯エキス粉末2%混餌6日間経口摂取 (day 19-24) をそれぞれ単独ないし併用した際の、腫瘍サイズ、体温変化を測定。

【結果】IFN- α 投与後4日目 (day 28) の腫瘍サイズは、コントロール群 643 ± 212mm³、IFN- α 群 397 ± 167mm³、麻黄湯群 463 ± 148mm³、併用群 246 ± 89mm³であった。すなわち、IFN- α および麻黄湯はそれぞれ単独で抗腫瘍効果があり、さらに併用により抗腫瘍効果を増強する傾向がみられた。体温変化はIFN- α 単回投与120分後で、コントロール群よりも0.5℃上昇したが、麻黄湯はこの上昇を抑制した。

【総括】マウス担癌モデル系で、麻黄湯はIFN- α の副作用である発熱を抑制し、さらにIFN- α の抗腫瘍効果を増強する傾向が認められた。腎癌有転移症例にIFN- α を投与する際、麻黄湯を併用することで、副作用を軽減しつつ抗腫瘍効果を増強することが期待できる。